

# 縄文時代の河北潟

平口 哲夫

金沢医科大学人文科学教室

〒920-0293 石川県河北郡内灘町大学1-1

**要約:** 宇ノ気町上山田貝塚出土の魚貝類から推定した古環境と周辺地域における遺跡分布から推定した古地形とは整合性がある。河北潟は、同貝塚が形成された縄文時代中期(約5000～4000 B.P.)の前葉には、すでに潟としての基本的な姿を見せていたのである。狩猟・漁労・採集を生業基盤とした縄文時代においては、潟はほとんど自然の力だけで緩やかに変化し、その変化に対して人間も動植物も無理なく適応を遂げることができた。潟周辺に居を構えた縄文人の生業活動を明らかにすることは、潟と人間との深い関わりを理解するうえで役に立つであろう。そのことはまた、ざっと5000年にわたる河北潟の歴史のうち、最後の1%に満たない期間に急激な変貌をもたらしてしまった現代文明を省みるよすがともなる。

**キーワード:** 河北潟, 内灘砂丘, 縄文時代, 上山田貝塚, 動物遺体, 水域環境

## 1 はじめに

2000年9月30日(土)、勤務先の学友会が主催する内灘祭を見学、フリーマーケットをうろついていたところ、NPO法人・河北潟湖沼研究所のコーナーが目にとまった。パネル展示を拝見し、ニュースレターやパンフレットを手にとって、カンパの箱に寸志を投じたところ、受付の女性がドライフラワーをくださった。その袋にホームページのアドレスが記載されていたので、さっそく訪ねてみた。インデックスの「河北潟」をクリックすると、干拓以前の河北潟について、かつて私が取り組んだ分野とも関係の深い事柄が紹介してあった。そこで、過去の河北潟に関連したサイトが当方にも設定してあることをEメールで事務局にお知らせした。すると、すぐに高橋久氏からご返事があり、本誌に投稿のお誘いをうけたので雑文を呈することにした次第である。なお、文中、敬称はすべて「氏」で統一させていただいた。

## 2 上山田貝塚の発掘調査と貝類組成

私は、1974年3月、9年間にわたる学生・院生の生活に終止符を打ち、仙台から郷里金沢に戻ってきた。そして、医学生の教養教育に従事しながら、はじめて調査主任を担当したのが、1975・76年に実施された宇ノ気町上山田貝塚の第二・第三次発掘調査である(平口ほか,1979)。高橋氏が送ってくださった河北潟総合研究第3巻の巻頭言によると、大串龍一氏が広大な干拓地の草原で動植物の調査を開始されたのが1974年であるという(大串,1999)。ちょうど同じ頃、私は河北潟の北部に面する上山田貝塚の調査に着手し、その関係で河北潟の変遷や古環境に関心をもつようになったわけだ。

本貝塚は、宇ノ気町上山田の通称タチヤマと呼ばれる台地の斜面に形成された縄文時代中期の貝塚である。1930年11月、宇ノ気町の開業医久保清氏によって発見され、翌年3月、同氏らによって発掘調査されている(第一次調査)。1948年に発足した石川考古学研究会が町史編纂

事業に関連してこの貝塚の発掘調査を担当したのは、1960年6月のことであった(第二次調査)。これらの発掘調査による出土遺物は、私が調査主任を担当した当時、宇ノ気町立西田記念館や石川県立郷土資料館(現在、石川県立歴史博物館)に展示してあった。展示ケースに並べられた出土貝類を見ると、淡水産のイシガイやオオタニシ、汽水産のヤマトシジミがあるのは当然として、サザエ、ツメタガイ、レイシ、パイ、サルボウ、ベンケイガイ、イタヤガイ、マガキ、チョウセンハマグリ、オキアサリ、サラガイなど、海産貝類のほうが多い。従来、上山田貝塚が形成されたころの河北潟の古地形を「河北入江」としてしばしば推定復元されたのは、このような保管遺物からうけた印象によるところが大きかったのではないと思われる。ところが、私どもが発掘調査してみると、本貝塚の貝類組成の量的主体は海産貝類ではなく淡水産貝類であることが明らかとなった。魚類組成においても同様、フナやナマズなどの淡水産魚類が主体をなし、サメ、マダイ、クロダイなどの海水産魚類は量的に少なかったのである。

淡水産の貝殻は壊れやすいが、海水産の貝殻は概して丈夫であるから、発掘調査の現場で保存状態のよい貝殻だけを採集すると、どうしても海水産の貝類を多く持ち帰ることになってしまう。このようなことでは貝類や魚類の正確な組成を求めることはできないので、私どもは調査グリッド間で柱状のブロックサンプルを採取するとともに、各層ごとに適宜ブロックサンプルを採取して、統計的なデータを得やすいようにした。

上山田貝塚は縄文時代中期の前葉(新崎式期)から中葉(上山田式期)をへて後葉(串田新式期)にいたる時期に営まれた遺跡である。ブロックサンプルの分析を進めていくと、前葉の層のサンプルでオキアサリの出現率の特に高い例があり、また、後葉の層のサンプルでヤマトシジミの出現率が若干多い傾向が認められ

た。これはあたかも「河北入江」から河北潟への変遷を示唆しているかのように見えるが、しかし、これらのサンプルの層序は土壌の性質や貝の種類などによって細別した結果であるから、各層の貝類組成に差が生じるのは当然であり、その差が時期的な相違を示すとは限らない。そこで、各時期ごとにまとめて集計してみると、オキアサリを主体とする海水産貝類の出現率は前葉に高く(20.2%)、中葉(13.4%)、後葉(11.5%)と新しい時期になるにつれ減少するが、後葉でもなお10%台を占めていることが分かった。これに対し汽水産のヤマトシジミは、前葉と中葉では1%未満であり、後葉では6.3%と増加するが、概して低率である。そして、前葉・中葉・後葉を通じて圧倒的に多いのがイシガイを主体とする淡水産貝類である(79.3%、86.6%、82.3%)。ただし、中葉・後葉の時期については、1サンプルのみの結果であるので、時期的変遷についての判断は慎重を要する。発掘現場での観察では、ヤマトシジミは第5～7区(前葉主体)にはまれで、第8～10区(中葉・後葉主体)に比較的多く認められた。

そこで問題になるのがオキアサリの産出水域である。松島義章氏の教示によると、オキアサリは内湾よりも外海に面した沿岸砂底に生息するのが普通で、チョウセンハマグリと共存することが多い。仮に当時の河北潟が入江状を呈していたとしても、入江内ではオキアサリの生息に不適當である。オキアサリの産出水域を貝塚の最寄りに求めるならば、古河北潟ではなく外海の沿岸砂底しか考えられない。現在、内灘の海岸をくまなく探索してもオキアサリの貝殻はまれにしか採集できないが、縄文時代には同海域で多く産出したに違いない。貝類は、環境のちょっとした変化で大発生したり、ほとんど産しない年が続いたりするなど、生息状況に変化が生じやすい。したがって、本貝塚におけるオキアサリの増減については、河北潟の変遷に結

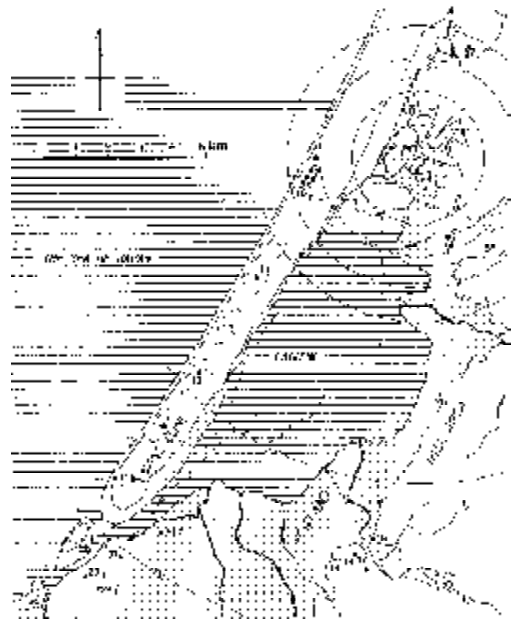
びつけるよりも、外海環境変化や人為的な要素が大きいと考えたほうがよいだろう（平口，1985）。

### 3 内灘砂丘と河北潟の形成

河北潟と日本海を分かち内灘砂丘には、上山田貝塚と時期的に重なる縄文時代遺跡が分布している。すなわち、北から宇ノ気町大崎クログケ遺跡（中期中葉・後期中葉）、内灘町西荒屋砂丘遺跡（中期後葉・後期前葉）・大根布砂丘遺跡（中期後葉・後期前葉）・向粟崎砂丘遺跡（前期後葉・中期中葉）、金沢市粟崎砂丘遺跡（中期中葉・後期前葉）などである。したがって、本貝塚の形成期に砂丘は粟崎辺りまで確実に延びていたと言えよう。

問題は、潟の入口付近が当時どうなっていたかということである。無量寺金沢港遺跡は、金沢港造成工事の浚渫土中から前期後葉と中期中葉の土器片が採集されたことにより認定されたもので、正確な位置が分かっているわけではない。もしこの土器を含む土砂が粟崎や大野海岸から浚渫船によって運ばれたとすると、前期後葉の時期にすでにこの辺りまで砂州が延びていたことになる。粟崎遺跡よりも北に位置する向粟崎遺跡からも前期後半の土器片が採集されているので、その可能性は十分考えられる。犀川・大野川河口に近い沖積平野には、金沢市近岡遺跡、寺中B遺跡、普正寺番野遺跡などの晩期遺跡が分布しており、晩期にこの一帯が陸地になっていたことは確実である。無量寺金沢港遺跡の位置が大野・粟崎の海岸寄りではなく、土器採集地点のすぐ近くであったとすると、沖積作用による陸化も意外に早く進んでいたことになる。

以上の遺跡分布から推定するならば、河北潟は遅くとも中期中葉のころまでには成立しており、その基本的なアウトラインの形成は前期後葉までさかのぼる可能性も考えられるのであ



- 1 上山田貝塚, 2 気屋遺跡, 3 指江A遺跡, 4 能瀬イシヤマ遺跡, 5 能瀬クサヤマ遺跡, 6 白尾クログケA遺跡, 7 白尾クログケB遺跡, 8 白尾クログケC遺跡, 9 大崎クログケA遺跡, 10 大崎クログケB遺跡, 11 西荒屋砂丘遺跡, 12 黒津船砂丘遺跡, 13 大根部砂丘遺跡, 14 向粟崎砂丘遺跡, 15 粟崎砂丘遺跡, 16 岩出ウツノ遺跡, 17 塚崎大谷遺跡, 18 百坂アラヤ遺跡, 19 松陵高校グランド遺跡, 20 近岡遺跡, 21 無量寺金沢港遺跡, 22 金沢大野砂丘遺跡, 23 普正寺番屋砂丘遺跡, 24 寺中B遺跡, 25 畦田遺跡, 26 南中条遺跡, 27 笠島遺跡, 28 宇気塚越遺跡（I：早期，E：前期，M：中期，L：後期，F：晩期）

河北潟周辺の縄文時代遺跡と縄文時代中期の水域推定図（平口，1985を改変）

る。このように遺跡の分布状況から推定された古地形は、上山田貝塚の貝類組成から推定された水域環境とも矛盾しない。

### 4 上山田貝塚出土の脊椎動物と河北潟

上山田貝塚出土の魚類遺体において、これまでに同定されたのは16種であるが、このうち河川・潟・湧水に生息する魚類としては、ウグイ、

コイ、フナ、ナマズ、ボラ、スズキ、クロダイ、マハゼ、サケ類、以上9種が知られている。しかし、魚類遺体の同定作業は不完全であり、未整理の貝層サンプルがまだ大量に残されていることから、今後の研究次第では、同定種の数をもっと増える可能性が高い。また、魚類組成をどのように算出するかという課題も残されている。本貝塚の報告書刊行後も貝層サンプルの整理を続行するつもりであったが、1982・83年に能都町真脇遺跡から多量に出土したイルカ骨の整理・研究に忙しくなり、魚類遺体のほうがすっかりおろそかになってしまった。このほうの研究は若い世代に大きく委ねざるをえないだろう。

本貝塚の鳥類遺体には、キジ、ウミスズメ、カモメ、カイツブリ、オオミズナギドリ、ウミウ、ガン類、カモ類、ワシ・タカ類がある。このうち特に興味深いのは、ガン・カモ類である。一般に、潟に面した貝塚では鳥類の出土がめだち、なかでもガン・カモ類は最もよく見られる。しかし、本貝塚では、東北地方の北上川中流域の淡水産貝塚群に典型的に見られるようなハクチョウ、マガン、ヒシクイなどの大型鳥類はほとんど出土していない。ガン類の骨は、第一次発掘調査出土資料の中に2点含まれていただけである。圧倒的に多いのは、中・小のカモ類なのである。このような鳥類組成が当時の上山田貝塚周辺の鳥類相をどの程度反映しているかは、貝類の場合と同様、自然的要因だけでなく文化的要因も加味して検討する必要がある。

最後に哺乳類について述べておきたい。ノウサギ、ネズミ類、ムササビ、タヌキ、キツネ、イヌ、テン、アナグマ、カワウソ、アシカ類、イノシシ、ニホンジカ、イルカ類、クジラ類が出土している。個体数では、イノシシ(19.5%)、ムササビ(19.5%)、シカ(14.6%)の順に出

土率が高い。カワウソは、縄文時代貝塚からの出土はめずらしくないが、いまや絶滅に瀕して久しく、四国地方に生き残りがいるかどうかがか時折話題になるだけに、特に注目したい水辺の哺乳動物である。

## 5 おわりに

第4章で述べたように、河北潟の古地形を復元し、沿岸における縄文人の生活を考察するうえで、内灘砂丘遺跡の存在は極めて重要である。砂丘上からは明治時代以来、点々と縄文時代遺物が採集されてきたものの、その正確な出土地点については現在不明となっているのがほとんどである。金沢医科大学に赴任した当初、私も砂丘地をくまなく探してみたが、残念ながら縄文時代の遺物は発見できなかった。人為によるだけでなく、激しい波や風による砂の移動が、この百年の間に遺跡を破壊したり覆い隠したりしたのであろう。

この25年間は、河北潟も内灘砂丘も開発によって劇的に変貌し、現在なお進行中である。このような現代を省みるうえで、本稿が些かなりとも参考になれば幸いである。

## 引用文献

- 石川考古学研究会編．1979．上山田貝塚 石川県河北郡宇ノ気町上山田遺跡調査報告 ．宇ノ気町教育委員会 ．
- 大串龍一．1999．河北潟の二十四年．河北潟総合研究．3:1-2 ．
- 平口哲夫．1985．北陸における縄文時代の動物遺体出土遺跡と水域環境 上山田貝塚の立地分析を中心に ．石川考古学研究会々誌 ．28:57-78 ．